付録①　俳句的生活

出典　『俳句的生活』（中公新書　二〇〇四年）

　「や」「かな」「けり」などの切れ字について、国語の教科書や俳句入門書のは強調するためとか省略の技法などと教えるが、どれも誤りである。①とに語ったように「を入るるは句を切るため」。これ以外にはない。

　では、「句を切る」とはどういうことかといえば、ただでさえ［　　Ａ　　］音しか許されないから俳句にはもともと文脈などほとんどないに等しいのであるが、そのわずかな文脈をさらに切り刻むということである。切り刻んで何をするかというと、言葉と言葉の切り口に②時間的、空間的なを生み出そうとする。

　「句を切る」ことによって生み出されるこの間こそ、短い俳句が文章や詩に匹敵し、あるいはそれ以上の内容を伝えることを可能にしている。間とは言葉の絶え間。すなわち沈黙。俳句は言葉を費やすのではなく言葉を切って間という沈黙を生みだすことによって心のうちを相手に伝えようとする。俳句の言葉はわずか［　　Ａ　　］音しかないが、俳句は内部に言葉の分量をはるかに上回る豊かな沈黙を包みこんでいる。

　　　Ⅰ　古池や飛びこむ水の音　　　　　芭蕉

　この高名な句は通常「古池にが飛び込む水の音が聞こえる」と解されているのであるが、これは切れ字「や」の働きを見落とした解釈である。これでな境地をうち開いた名句などといわれても、につままれたようでどこが閑寂なのかわからない。わからないからわかったふりをするしかない。

　そうではなくて、この句は「どこからともなく聞こえてくる蛙が飛び込む水の音を聞いているうちに心の中に古池の面影が浮かび上がった」といっているのである。ここで切れ字の「や」は現実の世界で起きている「蛙飛びこむ水の音」とは切り離された心の中に現実ならざる古池を浮かび上がらせる働きをしている。この心の中の古池こそが閑寂境にほかならない。

　　　Ⅱ　さまざまの事おもひ出す桜かな　　芭蕉

　この句の切れ字「かな」は眺めているうちにさまざまなことを思い出す桜の花をかけてげにする働きをしている。ここでは桜は目の前で咲き誇る現実の桜であると同時に、心の中のすでに思い出となった桜でもある。切れ字の「かな」がはるかな記憶のから一本の桜を呼び起こしてくるのである。この「かな」の働きはただ「さまざまの事おもひ出す桜」といった場合と比べてみれば歴然とするだろう。

語注　＊去来と丈草＝向井去来と内藤丈草。ともに江戸前・中期の俳人で、芭蕉の弟子として「」にあげられる。

　　　＊紗＝折り目の粗い、薄くて軽い織物。

【原文】

　「や」「かな」「けり」などの切れ字について、国語の教科書や俳句入門書の類は強調するためとか省略の技法などと教えるが、どれも誤りである。芭蕉が去来と丈草に語ったように「切字を入るるは句を切るため也」。これ以外にはない。

　では、「句を切る」とはどういうことかといえば、ただでさえ十七音しか許されないから俳句にはもともと文脈などほとんどないに等しいのであるが、そのわずかな文脈をさらに切り刻むということである。切り刻んで何をするかというと、言葉と言葉の切り口に時間的、空間的な間を生み出そうとする。

　「句を切る」ことによって生み出されるこの間こそ、短い俳句が文章や詩に匹敵し、あるいはそれ以上の内容を伝えることを可能にしている。間とは言葉の絶え間。すなわち沈黙。俳句は言葉を費やすのではなく言葉を切って間という沈黙を生みだすことによって心のうちを相手に伝えようとする。俳句の言葉はわずか十七音しかないが、俳句は内部に言葉の分量をはるかに上回る豊かな沈黙を包みこんでいる。

　　古池や蛙飛びこむ水の音　　　　　芭蕉

　この高名な句は通常「古池に蛙が飛び込む水の音が聞こえる」と解されているのであるが、これは切れ字「や」の働きを見落とした解釈である。これで閑寂な境地をうち開いた名句などといわれても、狐につままれたようでどこが閑寂なのかわからない。わからないからわかったふりをするしかない。

　そうではなくて、この句は「どこからともなく聞こえてくる蛙が飛び込む水の音を聞いているうちに心の中に古池の面影が浮かび上がった」といっているのである。ここで切れ字の「や」は現実の世界で起きている「蛙飛びこむ水の音」とは切り離された心の中に現実ならざる古池を浮かび上がらせる働きをしている。この心の中の古池こそが閑寂境にほかならない。

　　さまざまの事おもひ出す桜かな　　芭蕉

　この句の切れ字「かな」は眺めているうちにさまざまなことを思い出す桜の花に紗をかけて朧げにする働きをしている。ここでは桜は目の前で咲き誇る現実の桜であると同時に、心の中のすでに思い出となった桜でもある。切れ字の「かな」がはるかな記憶の彼方から一本の桜を呼び起こしてくるのである。この「かな」の働きはただ「さまざまの事おもひ出す桜」といった場合と比べてみれば歴然とするだろう。

問一　傍線部①「芭蕉」について、⑴代表作、⑵活躍した時代をそれぞれ次から選べ。〈3点×2〉

⑴　ア　徒然草　　　イ

　　ウ　奥の細道　　エ　歌よみに与ふる書

〔　　　〕

⑵　ア　安土桃山時代　　イ　江戸時代前期

　　ウ　江戸時代後期　　エ　明治時代

〔　　　〕

問二　空欄Ａに共通して入る適当な漢数字を答えよ。〈4点〉

　　〔　　　　　　　　　　〕

問三　傍線部②について、Ⅰ･Ⅱの俳句はそれぞれ「時間的」「空間的」のどちらに当てはまるか。〈5点×2〉

　　Ⅰ〔　　　　　　　　　〕　Ⅱ〔　　　　　　　　　〕

問四　次の俳句のうち、「空間的な間」を生み出すために切れ字を使っていると考えられるものを、二つ選べ。〈5点×2〉

ア　菜の花や月は東に日は西に（）

イ　我と来て遊べや親のない（小林）

ウ　遠山に日の当りたる枯野かな（高浜）

エ　降る雪や明治は遠くなりにけり（中村）

オ　あるけばかつこういそげばかつこう（）

〔　　　〕〔　　　〕

column 問四のヒント

★切れ字とは

　切れ字とは、句を切るための言い切りの形をつくる言葉。一般的には、助詞「や・か・ぞ・かな」、助動詞「けり・ず・らん（らむ）」だが、言い切りの形になっている活用語の連体形も含む。

　ちなみに、芭蕉は「切れ字に用ふる時は四十八字皆切れ字」（『去来抄』）としている。

★各俳句の現代語訳と作者解説

ア　訳　東の空には昇りかかる大きな月、西の空には沈みかかる太陽をいただいて、どこまでも見渡す限り広がる菜の花よ。

　与謝蕪村…江戸中後期の俳人・画家。絵画的・浪漫的な俳風。文人画でも有名。

イ　訳　さあ、私のところへ来て一緒に遊ぼう、親のない雀の子よ。

　小林一茶…江戸後期の俳人。自由でかつ素朴な人間味ある俳風で知られる。

ウ　訳　荒涼とした枯れ野原がどこまでも続いているけれど、はるか向こうの遠い山には日が当たって明るくなっていることだ。

　高浜虚子…明治七～昭和三四年。「写生説」「花鳥」という俳句理念で知られる。俳句雑誌『ホトトギス』主宰。

エ　訳　降りしきる雪よ、その白さを見ていると、はるかに遠ざかってしまった明治を思い出すことだ。

　中村草田男…明治三四～昭和五八年。人間探求派と称される俳風で知られる。

オ　訳　歩いても歩いても山は続き、かっこうの鳴き声だけが自分の共だ。

　種田山頭火…明治一五～昭和一五年。一生を漂泊の旅に過ごす。定型に縛られない自由律の俳句で知られる。

【解答】

問一　⑴＝ウ　⑵＝イ　〈3点×2〉

問二　十七（一七）〈4点〉

問三　Ⅰ＝空間的　Ⅱ＝時間的〈5点×2〉

問四　ア・ウ〈5点×2〉